六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

CREATOR INTERVIEW No 52

柳澤大輔 Daisuke Yanasawa

1974年香港生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒業後、ソニー・ミュージックエンタテインメントに入社。1998年、学生時代の友人と共に面白法人カヤックを設立。本社を置く鎌倉唯一の上場企業として、オリジナリティあるWebサイト、スマートフォンアプリ、ソーシャルゲームなどのコンテンツを発信する。100以上の企画のクリエイティブディレクターを務める傍ら、2012年カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル、2010年東京インタラクティブ・アド・アワード、2009〜2014年Yahoo! JAPANインターネットクリエイティブアワードなど各種Web広告賞で審査員も歴任。著書に『面白法人カヤック会社案内』(プレジデント社)、『アイデアは考えるな』(日経BP社)など。ユニークな人事制度(サイコロ給、スマイル給、ぜんいん人事部)や、ワークスタイル(旅する支社)を発信し、「面白法人」というキャッチコピーのもと新しい会社のスタイルに挑戦中。

小笠原治 Osamu Ogasawara

1971年京都府京都市生まれ。株式会社nomad 代表取締役、株式会社ABBALab 代表取締役。awabar、breaq、fabbit等のオーナー、経済産業省新ものづくり研究会の委員等も。さくらインターネット株式会社の共同ファウンダーを経て、モバイルコンテンツ及び決済事業を行なう株式会社ネプロアイティにて代表取締役。2006年よりWiFiのアクセスポイントの設置・運営を行う株式会社クラスト代表。2011年に同社代表を退き、株式会社nomadを設立。シード投資やシェアスペースの運営などのスタートアップ支援事業を軸に活動。2013年より投資プログラムを法人化、株式会社ABBALabとしてプロトタイピングへの投資を開始。DMM.makeプロデューサー。

NO 52

柳澤大輔 × 小笠原 治

面白法人カヤック 代表取締役CEO
Daisuke Yanasawa / CEO of KAYAC

株式会社nomad 代表取締役
Osamu Ogasawara / CEO of nomad

クリエイターインタビュー

『外から見る六本木、内から見る六本木』

photo_tsukao / text_kentaro inoue

鎌倉にオフィスを構え、サイコロ給など変わった制度でも注目を集める面白法人カヤック代表の柳澤大輔さんと、六本木にシェアオフィス「NOMAD NEW'S BASE」やスタンディングバー「awabar」を運営し、自らも六本木在住という株式会社 nomad 代表の小笠原治さんを迎えた、今回のクリエイターインタビュー。メイン写真の撮影は、東京ミッドタウン内にあるコミュニケーションスペース「d-labo」で、インタビューは六本木未来会議の読者 50 名を集め、公開形式で行われました。

六本木は、日本中、世界中から人が集まってくる「村」。

柳澤大輔 僕はカヤックという会社をつくった 17 年前、これからは面白く働く時代になるんじゃないかと考えて、「面白法人」というコピーをつけたんです。そして、どこでも働ける時代もくるんじゃないかということで、あえて本社を鎌倉に置きました。ようやく最近、鎌倉界隈に移ってくる会社も増えたし、理解されるようになってきましたね。

小笠原 治 僕は一貫して転々としてまして、たぶん 3 年以上続けた会社はないんじゃないかな。最近はスタートアップへの投資のほか、「DMM.make」という施設を秋葉原につくったり、ロボットの販売事業もしています。昔からそうなんですけど、僕はコンテンツをつくるのがすごく苦手なので、カヤックさんが妬ましい（笑）。だからつくる場所、プラットフォームをつくるということを続けています。

柳澤 ちなみに、初めて僕が六本木に来たのは高校の頃なんですけど、今でも外国人の方が

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

多いな、くらいの印象しかなくて。あと六本木ヒルズや東京ミッドタウンができて以降は、IT系企業がオフィスを置いているとか、そこの人たちが住んでいるとか、そんなイメージです。

小笠原 僕もこの対談の話がきたとき、「（六本木の）夜しか知らないですけどいいですか？」って聞きました（笑）。僕自身もそうですが、六本木って日本中、世界中から人が集まってきて、" 六本木村 " みたいなコミュニティをつくっているイメージ。だから居心地がいい、っていうのはありますね。

働く場所と住む場所、遊ぶ場所は近いほうがいい。

小笠原 僕が六本木に拠点を置いたのは、仕事が終わったら、すぐに飲みに行けるから（笑）。でも実は、もう少し真面目にも考えていて、家と職場、遊ぶところは近いほうが、より地元感が強くなっていいと考えたから。六本木って、この周辺に住んで働いて遊ぶ、通称「港区病」の人がけっこういるんです。新宿は通勤してくる人が多いイメージだし、渋谷の場合は中目黒とか少し外側に住んで、渋谷で働いて遊ぶイメージ。そういう意味でも、六本木は一番村っぽいんですよ。カヤックさんは、どうして鎌倉に？

柳澤 理由は単純で、海と山があるから。それだけです。僕、カヤックをつくる前にサラリーマンを 2 年くらいやってたんですけど、当時から高層ビルで働くイメージがなくて、その本能になるべく素直に従おうと。通勤時間も、できればないほうがいいだろうと思っていたし。

小笠原 六本木には高層ビルも多いですけど、僕らがやっている「NOMAD NEW'S BASE」がある西麻布のほうにいくと、低層の建物も多いですよ。さすがに海と山はないですけど。

柳澤 極論するとどこでもいいんですけどね。地域と一体化した会社をつくって、会社がよくなると地域もよくなって、働いている社員も楽しくなる。そういうことを目指した結果、選んだのが鎌倉。最近は、どこでも仕事ができるので拠点を持たないという人もいますよね。とはいえ、人間にはアイデンティティとかルーツも大事ですし、やっぱり組織とか拠点といったリアルな場所も必要だとは思いますね。

NOMAD NEW'S BASE

2011 年 12 月にオープンした、株式会社 nomad が運営するシェアオフィス。3 階建てのスペースに、カフェエリア、ワークエリアほか、セミナーのできるイベントエリアも併設。起業家を支援するパトロン会員制度もある。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

「カマコンバレー」と「awabar」、その街ならではの取り組み。

柳澤 最近では、他の会社の人たちとともに「カマコンバレー」という地域を盛り上げる活動もしています。最初は地元の人からもシリコンバレーみたいなものかと思われていましたけど、実際は名前が似ていながらも価値観としては違いますね。設立から 3 年たって、だいぶ理解していただけるようになりました。

小笠原 僕らは六本木で、「awabar」という小さな飲み屋をやっています。最初はうちのスタッフの、女性でも行きやすい立ち飲み屋がほしいという提案からはじまったんですが、あまり当たらなかった。でも、そのまま終わるのが悔しいので、1 年間僕が毎日お店に行って、来てくれたら 1 杯おごるというのを続けていたら、かわいそうだと思って集まってきた知り合いが、さらにまわりの人を呼んでくれて。

六本木なのに 500 円で飲めるとか、立ち飲みで 10 分 15 分チャットをするようにしゃべるというスタイルが、たまたまはまったんでしょう。六本木って、ちょっと変わったことをはじめるには面白い土地。鎌倉にもきっと、その街ならではのお店や会社ってありますよね?

柳澤 たしかに、特徴的な企業は集まってますね。本当に " いい会社 " にしか投資をしない「鎌倉投信」とか、売上の 1%は必ず環境団体に寄付する「パタゴニア」の日本支社とか。そういう会社があえて選ぶ、何か目に見えない、言語化できない価値があるんでしょうね。

カマコンバレー

カヤックのほか、鎌倉に拠点を置く 20 社以上の企業と多数の個人会員が参加。「この街を愛する人を、IT で全力支援」をキャッチコピーに、鎌倉体験ツアーやクラウドファンディングなど、さまざまなプロジェクトを行っている。

awabar

六本木駅徒歩 3 分、ビール・シャンパン・スパークリングワインなど泡モノ専門のスタンディングバー。2010 年 12 月のオープン以来、IT 関係者を中心に、さまざまな人たちが気軽に出会える場としても人気を集めている。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

photo_tsukao / text_kentaro inoue

いろいろな立場、いろいろな国の人が混ざっているからこそ面白い。

小笠原 六本木って 0 から 100 じゃないですけど、ワンルームマンションを借りてひとりで起業したばかりの人から、六本木ヒルズとか東京ミッドタウンに入居するような会社まで、それらがわずか半径 2 キロの中に存在しているのが面白いと思うんです。

柳澤 六本木って、たった半径 2 キロくらいですか?

小笠原 ヘタしたら 1 キロくらいかも。ひとりスタートアップから何千人の会社までをカバーできるエリアって、他には新宿と渋谷くらい。昨日も awabar に、フィンランド人、ドイツ人、アメリカ人、イギリス人が来ていて、全員が日本語で話してましたが、5 つの国の人が日本語という少数言語をしゃべってるなんて異常ですよね。そうやって、いろんな立場や人種の人が混ざっている状態が好きなんです。

さっき撮影で Google マップを操作していたとき、「未来を感じる街に行ってください」って言われて、僕はベルリンを選びました。その理由も同じで、混ざり具合が楽しそうだから。ベルリンは東欧との境目でもあるから、ドイツの緻密なものづくりとともに、東と西の経済格差も味わえる。何か新しいものが生まれそうな躍動感があるんです。

柳澤 カヤックには今、社員が 200 人くらいいるんですが、そのうち 2 割くらいが外国人。最近、いろんな国の人を採用してみて思うのは、それぞれが感じる面白さとか笑いのポイントが違うこと。たとえば日本人って自虐的なネタで笑うことができますが、それって世界から見れば少数派なんです。ちなみに、インドネシアの人はできそうな傾向がありますね。あくまで、カヤック調べですけど。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

小笠原 たしかに、それはヨーロッパだと難しいかもしれません。

柳澤 ちなみに 5 ～ 6 年前、あるエンジニア向けサイトに、英語で「すごいエンジニア募集！」って広告を出したことがあります。そうしたら、NASA で働いてたとか、ロボットがつくれるとか、ヨーロッパ各地からすごい人たちが応募してきた。でもまあ、だいたいが、あのー ..... 大げさだったりします（笑）。

デジタルのものづくりが " バブって " いくのを見ていたい。

小笠原 最近、ものづくり的な分野に関わっていて、思うことがあるんです。3D プリンターをはじめデジタルファブリケーションが話題になっていますが、それで（形はつくれても）ものがつくれるようになったわけではないということ。すごくざっくりいうと、この 20 年で進んだのはモジュール化。モジュールを買ってきてつないで、プログラムをしたら動きます、という時代になってきた。

あとは、フェイスブックとかソーシャルメディアが進歩して、世界中で 500 個なら売れるかもとか、ある層に 100 個なら売れるかもというのが、可視化できるようになったのも大きい。インターネットが流行った頃のように、これからデジタルのものづくりは絶対 " バブって " いく（＝バブルが起きる）ので、そこでみんながどういう態度を取るのか。それを見たいと思って、今ど真ん中にいるというわけです。

柳澤 盛り上がってますよね、DMM.make AKIBA。ブームじゃなくて、定着しそうですか？

小笠原 そうですね。あとはヒット商品がひとつ 2 つ出るだけで、そうなる可能性はあると思います。僕らがなぜアキバを選んだかというと、外国の方にも説明しやすいから。たとえば、アプリとかウェブサービスだったら六本木とか渋谷がなじみやすいというように、その土地、その土地の色ってありますよね。

柳澤 アキバは知名度むちゃくちゃありますもんね。鎌倉も、「鎌倉投信」とか「メーカーズシャツ鎌倉」とか、鎌倉の持ついいイメージがブランド名に使われている例はありますから。

DMM.make AKIBA

工作機械や検査機器など総額 5 億円の最新機材が揃う「Studio」、シェアオフィスやイベントスペースとして利用できる「Base」、ハードウェア開発の各種相談を行なう「Hub」から構成される総合型モノづくり施設。2014 年 11 月オープン。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

未来を変えるんじゃなくて、自分たちが変わって楽しむ。

柳澤 もちろん僕らもそういう未来には興味があるんですが、「未来を変えてやろう」ということは一度も言ったことはなくて、自分たちが変わって未来を楽しもうというスタイル。面白いものをつくろうとすると、自然と新しいことをやることになるし、これまでにないものをつくることになりますよね。

難しいのは、それをエンターテインメントとして成立させること。たとえば、アートの場合、死んだあとに評価されるということがありますよね。でも、僕らはもう少し手前で、生きてる現世の間に価値をちゃんと認められなきゃいけないとは思っています。

photo_tsukao / text_kentaro inoue

生活スタイルに合わせて、街を移り住む時代がやってくる。

小笠原 柳澤さんやカヤックの面白さの価値観って、やっぱり徐々に変化してます？

柳澤 もちろん時代によって、面白がるポイントは変わります。今日のテーマでもある街っていうことについていえば、今後はたぶん、生活スタイルに合わせて移り住む時代になっていくと思うんです。たとえば、おじいちゃんおばあちゃんになったときに最高に住みやすい街とか、子育てするならココっていう教育が充実した街とか。で、ウチの街はどのスタイルを狙っていくのか考えないといけなくなる。

小笠原 そうしないと街は生き残れない。

柳澤 これから日本は人口も減るし、家もたくさん余るでしょうから。実際、そういう変化が起

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

きないと、なかなか街自体も動き出せないでしょうし。だから今は、ピンチであるとともにチャンスでもあると思うんです。

50 ～ 60 ヵ国の祭りと料理が味わえるイベントを、六本木で。

柳澤 小笠原さんが、六本木でやってみたいことってあるんですか?

小笠原 そうですね。ずっと、麻布警察署が移転予定の場所で、お祭りをやりたいなと思っていたんです。六本木っていろんな国やいろんな地方の人がいっぱいいるので、みんなが子どものときに体験していたお祭りを持ち寄ってもらって。

柳澤 アメリカならアメリカ、東北なら東北とか。

小笠原 たぶん声をかけたら、50 ～ 60 ヵ国は集まる気がするんです。たとえば、東京ミッドタウンから六本木通りを挟んで反対側には、アフリカ系の方とかトルコの方とかが多くいるし、その向かいのロアビルに行けばクラブが並んでいて、ホステスさんがウロウロしている。働いているのも住んでいるのも、たぶん東京で生まれ育った人のほうが、ずっと少ないと思うし。

祭りだけじゃなくて、それぞれが自分の故郷の料理も出す。そこでウケたら、六本木でお店をやってもいいかもしれない。そんなイベントできるなら、僕、少しくらいならお金も出すし、労力も割きます。定着したら寺銭とれるかもしれないし（笑）。

麻布警察署
六本木交差点から六本木ヒルズに向かってすぐにある警察署。1972 年竣工の現庁舎が老朽化したため、2018 年 3 月、六本木 4 丁目の旧三河台中学校跡地の新庁舎に移転予定。

通勤が嫌なら、通勤自体を面白くしてしまえばいい。

柳澤 さすが投資家ですね。僕は最初に話した、通勤という点から考えてみました。通勤せずに仕事をするにはどうしたらいいか。ひとつはたとえば「スター・ウォーズ」のようにホログラフィーで自分を転送できるようにするとか。そしてもうひとつは、通勤自体を楽しくするという発想もあると思うんです。

小笠原 なるほど。

柳澤 今ある電車とかタクシーには楽しさがないと思うので、専用に開発した車なのかバスなのかで、鎌倉と六本木を結んで、それに乗って楽しく過ごしながら帰れる。なぜか六本木のすごく辺鄙な場所に鎌倉行きのバス停があって、1 日 2 回行き来している。それだったら僕、車代出しますよ（笑）。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

小笠原 そういえば、前に朝 4 時くらいまで飲んで、それから七里ヶ浜の bills まで、飲み屋のお姉さんと朝ごはんを食べにいったのを思い出しました（笑）。

柳澤 世界一の朝食を。僕が言ってるのは、まさにそういうことです！

小笠原〈六本木早朝発 bills 行き〉バスをつくったら、乗りたいっていう人は、それなりにいると思います。可能性は、あながち 0%じゃないですよね。

柳澤 そうそう、そういう感覚。普通の深夜バスみたいなのじゃなくて、「こことここ !?　こことここを毎日結んでるの？」みたいなのがあったら面白い。今って、その仕組みでよく成り立つよねというビジネスが成り立つ時代になってきているじゃないですか。もちろん、インターネットやソーシャルメディアのおかげっていうのもあるんでしょうけど。

小笠原 なんといっても、鎌倉には六本木にはない海も山もありますし。

柳澤 直島もそうですけど、ああいうアートの島が成り立つのは、ベネッセの福武（總一郎）さんが私財を投入したからでしょう。たぶん六本木と鎌倉だったらいると思うんです。「自分が運転手雇うよ！」みたいな太っ腹なことを言い出す人が（笑）。

取材を終えて ……

インタビューの最後には質疑応答も行われ、本編に盛り込めなかった話題もたくさん。その中から、編集部が気になったコメントをどうぞ。「会社に何をしてもらえるかじゃなくて、社長になったつもりで考えると楽しくなる。街も一緒で、どの地域が熱いとか便利だとか言っている限り、その街を好きになることもないし、楽しくなることもない」（柳澤）。「もしかしたら将来、働かないのが当たり前になって、一部特殊な、貴族みたいな人だけが働ける時代がくるかも、なんて妄想してます」（小笠原）。（edit_kentaro inoue）

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.